

大阪市立大学生活科学部紀要・第46巻(1998)

## ソーシャルワークにおけるシュワルツ理論の研究(2)

### —理論的基盤の検討と評価—

岩間伸之

#### A Study on the Schwartz' Theory in Social Work(2): Theory Foundation and Evaluation

NOBUYUKI IWAMA

#### 1. はじめに

本紀要第44巻(1997)においては、「ソーシャルワークにおけるシュワルツ理論の研究(1)－『著作集』(1994)の分析による基本的視座の形成－」と題して、ウィリアム・シュワルツ(William Schwartz)に関する基礎研究をすすめた<sup>1)</sup>。そこでは、著作集の分析を通して、シュワルツ理論を理解するための基本的視座として、①歴史的視座、②社会的視座、③実存的視座、④科学的視座、⑤実践的視座の5つを示した。

そこで本稿では、こうした5つの基本的視座を念頭におきながら、シュワルツのソーシャルワーク理論の全体像を体系的に整理することとその評価をまとめることを目的として、シュワルツの理論の理論的基盤について検討することにした<sup>2)</sup>。

本稿では、まず、ソーシャルワークにおけるシュワルツ理論の位置づけについて、機能主義学派とシュワルツ理論、グループワークにおける位置づけ、ソーシャルワーク理論に与えた影響について論じた上で、シュワルツ理論の理論的基盤として、共生的な相互依存関係と相互援助、「相互援助システム」と「トライアングルモデル」、「波長合わせ」と契約という基本的な3つの理論的基盤について論考する。さらに、続けてソーシャルワークにおけるシュワルツ理論の評価について考察する。

#### 2. ソーシャルワークにおけるシュワルツ理論の位置づけ

シュワルツのソーシャルワーク(グループワーク)論は、一般に「相互作用(交互作用)モデル(reciprocal model)」や「媒介モデル(mediating model)」として知

られている。このシュワルツの理論は、1960年代以降、現在に至るまでのソーシャルワーク及びグループワークの理論、実践、教育にわたって大きな影響を与え続けてきた。

ここでは、ソーシャルワークにおけるシュワルツ理論の位置づけとして、まずシュワルツ理論と機能主義学派の理論的關係について考察した後、グループワークモデルとしての位置づけとソーシャルワークに与えた影響について論考する。

##### 1) 機能主義学派とシュワルツ理論

「相互作用モデル」に代表されるシュワルツのソーシャルワーク(グループワーク)理論は、ケースワークという機能主義学派の影響を極めて強く受けた理論である。この「相互作用モデル」は、シュワルツ一人によって構築されたとされるが、その内容を分析するといわゆる「機能主義」の考え方を極めて色濃く反映していることがわかる。このことは、このシュワルツ理論の特性やソーシャルワークにおける位置づけを決定的なものにしている。

アメリカにおけるケースワーク理論は、第一次世界大戦を契機にフロイトによる精神分析の影響を強く受け、心理学・精神医学的な傾倒を強めることになった。そして、コロンビア大学やシカゴ大学等を中心に診断主義学派が形成されるに至った。一方の機能主義学派は、1930年代に入ってこの診断主義学派のアンチテーゼとしてペンシルバニア大学を中心に創始された一派である。この学派は、フロイトの弟子で、後にその袂を分かつこととなるオットー・ランク(Otto Rank)による「意志心理学」の考え方を背景としている。ソーシャルワークにおける機能主義学派の成立においては、ランクの影響を受けた

タフト (Jessie Taft) とロビンソン (Virginia Robinson) の2人が大きく寄与することになった。

ランクは、人間に本来的に備わっている潜在的な成長する能力を強調するとともに、そこに人間の多様性や創造性を尊重する人間観を打ち出した。このことは、診断主義学派がクライアントを援助者による治療 (treatment) の対象として捉えるのに対し、機能主義学派ではクライアントを変化と問題解決の主体者として捉えるという画期的な発想をもたらした。こうしたランクの思想や人間観は、ソーシャルワークのみならずロジャーズによるカウンセリング論にも多大な影響を与えたとされる。

ランクの考え方をケースワークに導入するにあたって、ワーカーの所属する援助機関の「機能」の力動を援助に活用する視点をその独自性として見出した。機関の「機能」を提示することによって、クライアント自らもつ創造力を喚起し、自由に選択と活用ができるように促すことが可能になるという立場をとる。この意味するところは、クライアントが社会サービスの限界を含めた「現実」を見据えるところにある。

こうした機能主義学派の考え方がシュワルツ理論に明らかな影響を与えた点を整理すると、次の4点に整理できる。第1には、問題解決の主体をワーカー側ではなく、徹底してクライアント本人の側に置くことである。つまり、治療の対象とするのではなく、変化の主体はクライアント自身にあり、それをワーカーが「援助」(helping)することを強調する点である。第2には、診断主義学派に比べて、過程の概念の理解を強調する点である。機能主義学派における開始期、支持期、終結期という援助過程 (helping process) は、シュワルツのモデルにもそのまま反映されている。これは「調査-診断-治療」といういわゆるSDTモデルと対峙する援助論の構築を意味する。第3には、機関の「機能」を援助の枠組みとして活用することで、「現実」に目を向けることを強調することである。シュワルツは「いま、ここで」(here and now) の関係を重視する。第4には、機能主義ケースワークが「機能を代表するワーカーと、社会的サービスと、それを利用しようとする (同時に、利用することを抵抗する) クライアントという3つの要因の間で展開される力動的な相互関係に特色がある」<sup>3)</sup>とされるように、これらの3つの要素の考え方は、後述する「トライアングルモデル」の基礎要素となったものと思われる。

こうしてみると、シュワルツのソーシャルワークモデルは、機能主義学派の理論を具現化したものといっても過言ではない。機能主義ケースワークの説明はややもすれば抽象的になりがちであるが、シュワルツは機能

主義学派の影響を強く受けたソーシャルワークモデルとしての説明概念を構築したともいえる。さらに、その機能主義ソーシャルワークの具体化は、借り物ではないソーシャルワーク固有の理論の構築に寄与するものでもある。

## 2) グループワークにおける位置づけ

シュワルツといえば、一般にはグループワークにおいて「相互作用/媒介モデル」を構築した人物として著名である。実際、前論文で検証したようにシュワルツが独自のソーシャルワーク理論の構築に寄与した論文の多くは、グループワークに関係する内容となっている。

シュワルツによる相互作用モデルは、グループワークにおける主要モデルとして「社会諸目標モデル (social goals model)」や「治療モデル (remedial model)」と並んで確固たる位置と地位を確立してきた。とりわけ、ヴァンター (Robert D. Vinter) らによる「治療モデル」との対比の中で、さらにその特徴を際立たせてきたといえる。

相互作用モデルが、機能主義学派の影響を強く受けていることは前述したとおりであるが、「治療モデル」は一方の診断主義学派のグループワーク版といえる。したがって、当然のことながらモデルとしては対峙することになる。1940年代にアメリカで巻き起こった診断主義と機能主義の激しい論争は、グループワークにおいては、ヴァンターとシュワルツのモデルという形で顕現することになった。機能主義の系譜にある代表的な人物としては、先のタフトとロビンソンをはじめ、ド・シュバイニッツ夫妻 (Elizabeth & Karl de Schweinitz)、フィリップス (Helen U. Phillips)、プレイ (Kenneth Prey)、スモーレイ (R.E. Smalley) らが挙げられるが、なかでもフィリップスのグループワーク論は、福田垂穂が指摘するようにシュワルツに受け継がれていった<sup>4)</sup>。

また、ジャーメイン (Carel B. Germain) によるグループワーク・アプローチの系譜として整理した図によれば、この相互作用モデルは「社会諸目標アプローチ (social goals approach)」、「システム理論 (system theories)」、「実存思想 (existential thought)」の3つの影響を受けていると分析している<sup>5)</sup>。

## 3) ソーシャルワーク理論に与えた影響

シュワルツのソーシャルワーク論は、ソーシャルワークの形成史においても重要な影響を与えてきた。その一つは、ソーシャルワークの統合化への寄与である。シュワルツのグループワーク論の特徴の一つは、グループワ

ークをソーシャルワークに含まれる一つの特異なケースとみなし、まず共通基盤としてのソーシャルワークを明確にし、そこからグループワークの定義を導き出さなければならぬとしたことにある<sup>6)</sup>。こうしたシュワルツの理論は、一元的統合論 (unitary approach) の立場に立って、1970年頃からのソーシャルワークの統合化の推進に寄与することになった。このことは、シュワルツ自身がソーシャルワーク固有の機能に拘泥しながら理論構築にあたってきたことによるものであるし、またシュワルツ理論が決してグループワークのみでなくソーシャルワーク全体を対象としている証明でもある。

さらに、ソーシャルワーク固有の機能としてシュワルツが提示した「媒介機能」(後述)は、ソーシャルワークの目的は「個人の治療」か「社会の変革」かという従来からのソーシャルワークの議論に一石を投じるものでもあった。シュワルツは、「個人」か「社会」かという二者択一的な議論が非生産的であると指摘した上で、「実践者は『人びとを変革すること』や『システムを変革すること』を必要とされているのではなく、お互いに取り組んでいく仕方を変革することを求められているのである」<sup>7)</sup>とソーシャルワーカーのすべき仕事を明確にした。シュワルツが個人と社会(システム)の出くわすところにソーシャルワーク固有の視点を求め、そこに介入するワーカーの仕事は「媒介」として明示したことは画期的な示唆であった。この固有の視点の設定が、シュワルツがソーシャルワークの対象の拡大に貢献したと評価されるゆえんでもある。

シュワルツの理論は、前論文で論じたように彼の死後に著作集<sup>8)</sup>が出版されたり、特集が組まれたり<sup>9)</sup>するなど評価が固まりつつあるだけでなく、医療モデルに対抗する一つのソーシャルワークモデルとして新鮮さをいまだ失っていない。また、シュルマン(Lawrence Shulman)やギッターマン(Alex Gitterman)らの理論的継承者たちによって具体的に受け継がれ、さらに新しい展開をみせている<sup>10)</sup>。

### 3. シュワルツ理論の理論的基盤 (1)

#### — 共生的な相互依存関係と相互援助 —

シュワルツが「相互作用モデル」という独自のソーシャルワーク論を構築するその原点には、人間と社会の関係を「共生的な相互依存関係」(symbiotic interdependence)<sup>11)</sup>と規定する考え方が存在している。個人と社会の関係は本来的には相反する関係ではなく、共存関係にあるという仮説がシュワルツ独自の援助論を導き出す強烈な動

機となっており、固有のソーシャルワークの機能を支持する基盤にもなっている。

個人と社会の関係をどのように規定するか。手を取り合う関係なのか、それとも敵対する関係とみるか。この命題は、ソーシャルワーク理論の方向性を決定づけることになる。「共生的な相互依存関係」を出発点とするシュワルツのソーシャルワーク論は、その拠り所となる「相互援助の思想」といえる思想的基盤をもつ。

シュワルツがソーシャルワークにおける相互援助の概念を発展させていく過程で、ミード(George H.Mead)やシェリフ (Muzafer Sherif)、クロボトキン (Pyotr A. Kropotkin)らの広範な思想から影響を受けている<sup>12)</sup>。特に、クロボトキンの思想はシュワルツのこの発想に大きな影響を与えたようである。ロシアの無政府主義者であったクロボトキンは、*Mutual Aid: A Factor of Evolution*(1902)において、ダーウィンの進化論の中心概念である生存競争や適者生存を否定し、相互援助 (mutual aid) が人間を含めた動物界の発展に重要な役割を果たすものとして論を展開している<sup>13)</sup>。このような思想は、シュワルツに「Mutual Aid」という言葉だけでなく、相互援助の概念の形成過程にも大きな刺激を与えたのではないかと思われる。

こうした相互援助の思想をグループワークにおいて具体的に展開している。シュワルツはグループワークにおける相互援助のグループに関して、「グループは一つの相互援助の事業体(an enterprise in mutual aid)であり、ある共通の問題を解決するために、多様な程度でお互いを必要としている人々の集まりである。重要なのは、これがワーカーだけでなくクライアントがお互いを必要とする援助システム(helping system)であるという事実である。一つだけでなく多くの援助関係をつくりだすためにお互いを活用するこの要求は、グループの形成に必要な特定の課題に加えて、グループ・プロセスの重要な構成要素であり、共通のニードをつくりあげるのである」<sup>14)</sup>と説明している。これは援助の中心をワーカーとメンバー間の関係からメンバー同士の関係に移行させたことを意味している。さらに、メンバー同士の相互援助関係を「システム」としてとらえたところに大きな特徴がみられよう。

グループワークにおける相互援助というのは、言ってみれば当たり前のことであり、シュワルツ独自の発想というわけではない。しかしながら、パーペル(Catherine P.Papell)とロスマン(Beulah Rothman)は、「シュワルツの前後にも、他の理論家たちによってグループにおける相互援助プロセスは認識されていたけれども、それを

サービスの装置としてのグループに関係させて、ソーシャル・グループワークの実践に方向づけし焦点を当てることに第一の意義を見いだしたのはシュワルツであった<sup>19)</sup>と評価している。つまりシュワルツのオリジナルな点は、この相互援助の概念やプロセスをグループワーク論の中心に据え、そこから独自の援助論を導き出しているところにある。シュワルツはそれまで曖昧であったグループにおける相互援助の概念を明確にし、それをソーシャルワークの援助の論理として活用したのである。

シュワルツのグループワーク論の魅力は、社会における人間存在の基本原理である相互援助という概念をソーシャルワークの根底に置いたところにあるといえよう。

#### 4. シュワルツ理論の理論的基盤 (2)

##### —「相互援助システム」と「トライアングルモデル」—

##### 1) 相互援助システム

「相互援助の思想」に基づき、グループを「相互援助の事業体」として位置づけ、さらにそれを援助システムとして捉えるという前節での考え方をシュワルツは「相互援助システム (mutual aid system)」として概念化させた。シュワルツは、グループワークにおけるクライアント・グループを「相互援助システム」と規定したのである。シュワルツはこれを「ある特定の課題達成に援助を惜しまぬ施設・団体であって、お互いの存在を必要としている人たち」<sup>20)</sup>と定義し、目指すべき理想的なグループの状態とした。

「相互援助システム」の特質については、「共生モデル」(symbiotic model) と「有機体モデル」の側面から分析できる。

共生モデルと相互援助システムの関係の根源は、シュワルツが個人と社会の関係を「共生的な相互依存関係」と規定したところに見いだすことができる。この個人と社会の共生的関係とは、「それぞれが存命と成長のために他者を必要とし、その時点で力の限りを尽くして他者に手を差し伸べること」<sup>21)</sup>であるとシュワルツは説明している。さらに、この「共生」についてシュルマンは、個々人の福祉をめざした社会的責任への信頼の基礎となるものであり、さらに他者との前向きな関係のなかで人生の欲求が最高の形で満たされるということを一人ひとりが発見することである<sup>22)</sup>としている。

こうした「共生」という概念は「もちつもたれつ」といった人間社会の本質であるといえる。ただ留意すべきは、この共生が成長のための関係でなければならないことである。個人と社会が不健康な依存関係ではなく、双

方が共に成長していくための相互依存関係を構築していかなければならない。この「共に成長していく」視点が共生的関係に必要であり、決してどちらか一方だけに利益をもたらす寄生的関係であってはならないのである。この共生への可能性がワーカーに交互作用関係というものを見方を提供し、明確で実行可能な専門的機能をもたらすことになる<sup>19)</sup>。

「お互いの存在を必要としている人たち」というクライアント・グループ観は、まさに共生モデルから導かれた「相互援助システム」としてのグループの特質を的確に表現している。グループワークの対象となるグループは、ある特定の共通問題を取り扱うために集まった人たちによる相互援助の事業体である。シュルマンとギッターマンは、「グループにおける相互援助の概念は、シュワルツが学説にもたらした主要な貢献の一つであり、援助の源をグループのリーダーからメンバーたち自身へ移行した」<sup>20)</sup>と指摘している。グループは問題解決のためにワーカーだけでなく、お互いのメンバーを必要とする「援助システム」(helping system)として形成される。ギッターマンはグループにおける「相互サポート」(mutual support)に関する論文のなかで、「事態を変化させ改善していくために、グループとしての集会的な資源と同様に、その一つが自分自身であることを感じるように援助されることは、新しい問題解決の手だてと行動を導く強烈な動機となる」<sup>21)</sup>と相互援助の重要性について言及している。そのことにより、グループは限られた一部のメンバーのために存在するのではなく、メンバー全員が相互に影響し合い、共通の問題をとりあげ、共に成長していくための存在となる。グループ内の複数の援助関係が相互援助システムに必要な不可欠な構成要素であり、さらにこれがシステムとして力動的な定常状態 (a dynamic steady state) を保っていくことになる。グループワークの援助プロセスは、グループ内の「複数の援助関係」を「相互援助システム」という理想のグループ状態に形成し、さらにそれを高度に発展させていく道程であるといえよう。

こうした「共生モデル」を基盤として導き出された「相互援助システム」を、シュワルツはグループワークにおける理想的なグループとして位置づけたのである。

共生モデルから導かれた相互援助システムは、さらに有機体モデルとして位置づけることによってその特質が明確になる。シュワルツはグループを有機的全体 (an organic whole) としてとらえる視点を示し、その性質はメンバー一人ひとりを分析することによってではなく、複雑な相互依存関係をもつ人間の集まりをグループ

という有機的組織体としてとらえることで理解できるとする。シュルマンは、人間の社会システムに関心をもつ多くの理論家が、機械体より有機体を選択するのは有機体の成長(growth)と創発的行動(emergent behavior)への可能性に影響を受けているとし、「この成長と創発的行動という言葉は、システムがそれ自身を超越し、単なる部分の総和以上の新しい何かを創造するプロセスを意味している」<sup>20</sup>と指摘している。これをグループにあてはめたとき、メンバー一人ひとりの総和以上にメンバーとワーカーが何を創造できるのかを明らかにしておく必要がある。

シュルマンはこの点に関して、グループにおいて共通の関心事を見いだすことと、グループとしての行動規範を創造していくことの二つが、単なるメンバーの集まり以上のものを生み出す重要な例としている。メンバー全員によるグループの目的に沿った共通の関心事を模索し、そこで一致点を見いだすことは、メンバー間の結びつきを強化する触媒となる。ギッターマンは、「最適な相互サポートの発達のためには、グループのメンバーは構造上の同質性からくる安定性と、構造上の異質性からくる多様性を必要としている」<sup>21</sup>とし、理想としてはその両方が必要で、グループに確固たる共通基盤としての関心事を見いだすことができれば、多様性を有効に活用できるとしている。

一方、グループとしての行動規範を確立するということは、グループの文化を創造していくことにほかならない。グループにおけるメンバーの活動は、受け入れられた行動規範を含む多くの要素からつくられたグループの文化によって大きく左右される。最初はメンバーが持ち込んできたより広い社会一般の文化に影響されるが、セッションが進むにつれ、メンバーの行動を左右する新しい文化があらわれる。この文化がメンバーの行動の拠り所となり、グループの凝集性が高まっていくのである。

さらにこうした有機体モデルとしてのグループの特性は、エコロジカル・パースペクティブからとらえることによって概念的に強化され、発展への活路を見いだすことができる。

有機体モデルとしての相互援助システムにおいても、エコロジカル・パースペクティブが多くの示唆を与えてくれる。相互援助システムにおける適応とは、メンバーが環境としてのグループに一方的に合わせるのではなく、メンバーとシステムとの間の交互作用を通して双方に変化を促し、良好な適合状態を形成していくことを意味する。この状態こそが相互援助システムとして機能する最適な状態であり、個々のメンバーにとって成長のた

めの滋養的空間となる。グループの成長というのは相互援助システムをより高度に発展させることであり、そのプロセスはメンバー間の交互作用によって生み出されたグループにさらなる適応をしていくことなのである。また、相互援助システム自体も、所属機関や社会といったより大きなシステムである環境との交互作用を通して良好な適合状態をつくり上げる。そうすることによって相互援助システムを媒体として、メンバーと社会との発展的成長関係を結ぶことができるのである。

有機体モデルとしての相互援助システムの最大の魅力は、メンバー間の交互作用がグループ独自の規範や文化を創出し、それがメンバー個々の行動に影響を与えると、この相乗作用の中で全体としてのグループ(group-as-a-whole)が成長していく創発的可能性にあるといえよう。

こうした特性をもつ「相互援助システム」の概念は、シュワルツ理論においては極めて深い意味をもっている。シュワルツのモデルにおいては、あらかじめ援助目標を設定することはない。機能主義学派の影響を受けたシュワルツのモデルでは、到達目標は現実性の中で本人が見つかることになる。それを支援するワーカーはその理想的な状態としての「相互援助システム」の形成を目指す。それが最善の結果を導き出す問題解決の媒体となるはずであるからである。したがって、「相互援助システム」は、社会的存在としての人間存在、ソーシャルワークの内在的価値、機能主義に基づく具体的なソーシャルワーク実践とを見事に結ぶ概念となったのである。シュワルツは、社会における人間存在の基本原理である相互援助という概念をソーシャルワークにおける援助の概念として位置づけることに成功したのである。

## 2) トライアングルモデル

以上のような理想的な状態を目指すワーカーの機能について、シュワルツは、「ソーシャルワークの専門職における共通の仕事は、自己実現に向けた相互のニードを通して、個人と社会がお互いに手を差しのべる過程を媒介することである」<sup>20</sup>とし、ソーシャルワークの専門的機能とは「媒介機能」(mediating function)であると示した。この概念は、図1のようにクライアントとシステムを媒介するトライアングルモデルとして図式化される<sup>20</sup>。これは「クライアント」「クライアントを取り巻くシステム」「ソーシャルワーカー」の三者関係で構成される。シュワルツがワーカーのことを「相互作用者」(interactionist)と表現していることから分かるように、ワーカーの媒介機能とはクライアントとシステムの双方に働きかけることによって、この両者の相互作用を促進させることで

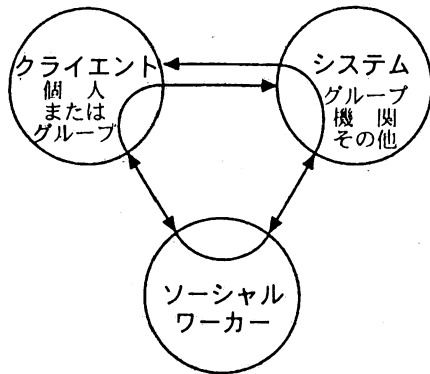


図1 「相互作用モデル」における媒介機能 (トライアングルモデル)

あると理解できる。

図からも明らかなようにワーカーは二つのレベルの媒介者となる。一つはグループとそれを内包する機関とを媒介する外部的媒介であり、もう一つがメンバーとそれを内包するグループを媒介する内部的媒介である。つまり、システムである地域社会のサブシステムが機関であり、そのサブシステムがグループとして位置づけられる。それぞれのシステムがワーカーの媒介機能によって葛藤、協力、対決、交渉等の結合形態<sup>26)</sup>をとることになる。さらにシュワルツは、グループを対象とした内部的媒介については、「ワーカーの特別な機能というのは、ちょうど各自が全体の一部となるように他者を活用し、グループのなかで自分の役割を明確かつ強化することによって、あるいはその共同体が活動している生産的全体に部分を統合するような組織と風土を發展させることによって交互作用を媒介することである」<sup>27)</sup>と、交互作用の概念を用いて詳しく説明している。

ここでシュワルツが、ワーカーの媒介機能を具体化するために提示した5つの課題(task)をあげておくことにする。これらの課題は、シュワルツの援助論の特質を明快に表したものとなっている。

- ①クライアントが知覚している自分自身の要求とクライアントが直面している社会的要求(システム)との間に共通基盤を見いだすこと。
- ②共通基盤を見いだす障害を発見し、それに立ち向かうこと。
- ③クライアントが入手しにくく、かつクライアントに役立つ情報を提供すること。
- ④クライアントとクライアントの問題について、ワーカー自身の感情を率直かつ直接伝えること。
- ⑤クライアント-ワーカー関係が成立している状況について、その必要条件と限界を明確にすること。<sup>28)</sup>

## 5. シュワルツ理論の理論的基盤 (3) - 「波長合わせ」と契約 -

シュワルツのグループワーク論では、前もって処遇目標を設定するのではなく、メンバーのグループにおける「いま、ここで」(here and now)の存在に焦点を当てることを強調する。こうした特徴は、援助プロセスに顕著に表される。シュワルツはグループへの取り組みを4つの段階に分けて説明する。その段階とは、「波長合わせ」(tuning-in) のための準備期、「契約」が中心課題となる開始期、先ほどの5つの課題の遂行が中心となる作業期、分離とサービスの終結に向かう終結期である。このなかで、「波長合わせ」と「契約」の概念は極めて特徴的であるので簡単にとりあげておく。

シュワルツは準備段階において、「ワーカーは非常に敏感で洞察力にあふれていなければ捉えることが困難な、名状し難いほど微妙で迂回したクライアントからの合図を間違いなく受けとめるような準備に専念する」<sup>29)</sup>としている。これがシュワルツが「波長合わせ」と呼んだ一種の「予備的感情移入」である。これはクライアントを診断的にとらえ、その診断にもとづいてグループというシステムでの行動を予測することが極めて困難であるという、従来からの治療モデルとは対峙した見解によるものである。クライアントがどのような感情をもってグループに参加してくるのか、またそこでどのようなテーマが表面化するのかを前もって掘り起こしておくことは、それ以後の援助過程をスムーズに進めることになる。

また、開始期の中心課題として「契約」を明確化したことは、シュワルツの特徴的かつ重要な貢献といえる。ワーカーはこの段階で、クライアントがはっきりとした焦点を見だし、取り組みの諸条件を明確にすることができるよう援助する。その過程で、機関、ワーカー、メンバーの目的と役割が一致し、特定化されるのである。この段階でのグループワーカーの課題をシュワルツは4つに整理している。要約すれば、①なぜサービスが提供されるのかをはっきりと述べること、②機関とグループにおけるワーカーの役割を述べること、③ワーカーの述べたことに対してメンバーの反応を促し、彼らの考えや要求とどのように一致点を見いだすかを考察すること、④ワーカーとメンバーが共に取り組んでいくためのテーマと枠組みに関して合意を見いだすこと<sup>30)</sup>、である。

## 6. ソーシャルワークにおけるシュワルツ理論の評価

1960年代以降、シュワルツのソーシャルワーク（グループワーク）理論は、ソーシャルワークの研究、実践、教育にわたって広大なインパクトを与えてきた。そのシュワルツ理論の評価について5点から整理し、そのあと課題について言及する。

第1には、機能主義学派の系譜に位置する理論として、目で見える具体的な形で概念化に成功したことである。診断主義学派に対抗するモデルが抽象的な理念レベルでは終わらず、モデルとして具現化されたことは、ソーシャルワークの本質や固有性を明確にする上でも極めて意義のあることといえる。

第2には、シュワルツのモデルが、隣接諸領域からの借り物ではなく、個人と社会の基本原則及びソーシャルワーク固有の基盤に依拠して展開されていることである。ソーシャルワークの価値や理念と援助の方法論を一貫性のある整合性の高いモデルとして構築したことは、ソーシャルワーク研究においては画期的なことであるといえる。

第3には、ソーシャルワーク固有の機能を「媒介」と規定し、その概念化に成功した意義も大きい。実際には、ソーシャルワーカーの機能及び役割は広範なものであるが、それらを筋の通った「媒介」という説明概念を確立したことは、ソーシャルワーク機能の明確化を押し進めることになったと評価できる。

第4には、その媒介機能の前提にある「相互援助システム」の概念が、「相互援助」という自然界や人間社会の基本要素にその根拠を置くところに極めて大きな強みがあることである。これは、自己決定という援助概念とあらかじめ処遇目標を設定しないという特質を支える基礎概念となる。

第5には、ソーシャルワークの統合化に影響を与えてきたシュワルツ理論が、ソーシャルワークとしての共通の視座を明確した上で、グループワークの説明が可能であることを具体的に証明したことである。グループワークの説明であっても、それはそのままソーシャルワークの説明として援用できるものとなっている。

シュワルツ理論の課題ないし批判については、楽観主義に過ぎるということがいえよう。つまり、個人と社会が「共生的な相互依存関係」にあることを前提としているものの、「共生的でない関係」もしくは「お互いに手を取り合えない関係」に対するどのようにアプローチするのかの説明が十分ではないことである。確かに、このモデルではその説明は必要ないという見解もあると思われるが、特に「アドボカシーの概念」については十分言及されていない。さらに、トライアングルモデル等、高度

に抽象化されているため、実践レベルとはやや距離がある。実践への応用のためには、シュルマンが取り組んだようなスキル研究や視点を定めた援助過程の具体化が求められる。また、ソーシャルワーク及びグループワークにおける「相互援助システム」の問題解決のメカニズムについては、事例の分析によってさらに明確化する必要性がある。

## 7. おわりに

シュワルツの理論は、グループワークのみならずソーシャルワーク理論全体に大きな影響を与えてきた。シュワルツ理論を深めることは、その特性上ソーシャルワークそのものを深めることにもつながる。個人と社会との相互依存関係、相互援助システム、固有の機能としての媒介等、ソーシャルワークの価値に深く根ざした一貫した理論構築は、極めて魅力のあるものであるといえる。今後の課題としては、機能主義学派との理論的整合性について考察を深めることができれば、シュワルツ理論をさらに深く理解できることになるのではなかと思われる。

前論文と合わせて2回にわたって論述した「ソーシャルワークにおけるシュワルツ理論の研究」は、筆者がシュワルツ理論を基礎部分として展開すべく取り組んでいる「媒介・過程モデル」の土台部分でもある。今後は、さらにシュワルツの論文に基づいて忠実にその概念を掘り下げる作業を続けるとともに、「媒介・過程モデル」の構築にも力を注いでいきたい。

## 注

1) 岩間伸之「ソーシャルワークにおけるシュワルツ理論の研究(1)－『著作集』(1994)の分析による基本的視座の形成－」『大阪市立大学生生活科学部紀要』第44巻, 1997, pp.243-252.

2) ウィリアム・シュワルツのソーシャルワーク論については、次の論文で考察している。なお、本稿においては、シュワルツ理論を体系的にまとめることを意図したため、これらの内容と一部重複している。

岩間伸之「グループワークにおける相互援助システム－ウィリアム・シュワルツの遺産として－」『社会福祉学』第33巻第2号, 日本社会福祉学会, 1992, pp.137-162.

岩間伸之「グループワークにおける『媒介』の思想－W. シュワルツの実存への思索－」『同志社社会福祉学』

第7号,同志社大学社会福祉学会,1993,pp.62-73.

岩間伸之「グループワークにおける援助過程研究-W.シュワルツによる媒介機能の展開-」『ソーシャルワーク研究』第20巻第3号,相川書房,1994,pp.44-49.

3) 黒川昭登『臨床ケースワークの基礎理論』誠信書房,1985,pp.144-145.

4) 福田垂穂「日本語訳への序」H.U.フィリップス著/花村春樹訳『グループワーク実践の基礎』相川書房,1978, p. ii.

5) Carel B. Germain, "Technological Advances", in Rosenblatt, A. and Waldfogel, D., eds., *Handbook of Clinical Social Work*, Jossey-Bass, 1983, p.29.

6) William Schwartz, "The Social Worker in the Group", *The Social Welfare Forum (New Perspectives on Services to Groups: theory, organization, practice, NASW, 1961)*, Columbia University Press, 1961, pp. 149-150.

7) William Schwartz, "Private Troubles and Public Issues: One Social Work Job or Two?", *The Social Welfare Forum*, Columbia University Press, 1969, p.40.

8) Toby Berman-Rossi(ed.), *Social Work: The Collected Writings of William Schwartz*, F.E. Peacock Publishers, Inc., 1994.

9) Lawrence Shulman and Alex Gitterman(eds.), *The Legacy of William Schwartz: Group Practice as Shared Interaction (Social Work with Groups, Vol.8, No.4)*, The Haworth Press, 1986.

10) Lawrence Shulman and Alex Gitterman(eds.), *Mutual Aid Groups and The Life Cycle*, F. E. Peacock Publishers, Inc., 1986.

Lawrence Shulman, *Interactional Social Work Practice: Toward an Empirical Theory*, F. E. Peacock Publishers, Inc., 1991.

Lawrence Shulman, *The Skills of Helping Individuals and Groups*(third ed.), F. E. Peacock Publishers, Inc., 1992.

11) William Schwartz, "Toward a Strategy of Group Work Practice", *Social Service Review*, Vol. 36, No.3, 1962, p.271.

12) William Schwartz, "The Social Worker in the Group", *The Social Welfare Forum (New Perspectives on Services to Groups: theory, organization, practice, NASW, 1961)*, Columbia University Press, 1961, p.156.

13) P.クロボトキン著/大杉榮訳『相互扶助論』春陽堂,1917.

14) Schwartz, "The Social Worker in the Group", p.158.

15) Catherine P. Papell and Beulah Rothman, *The Legacy of William Schwartz: Group Practice as Shared Interaction (Social Work with Groups, Vol.8, No.4)*, The Haworth Press, 1986, p.1 (Editorial).

16) W.シュワルツ著、前田ケイ訳「ソーシャルワーク実践におけるグループの活用について」, 前掲書, p.5/ William Schwartz, "On the Use of Groups in Social Work Practice", op. cit., p.7.

17) Schwartz, "The Social Worker in the Group", op. cit., p.155.

18) Lawrence Shulman, *The Skills of Helping Individuals and Groups*(second ed.), F. E. Peacock Publishers, Inc., 1984, p.7.

19) Alex Gitterman, "The Reciprocal Model: A Change in the Paradigm", *The Legacy of William Schwartz: Group Practice as Shared Interaction (Social Work with Groups, Vol.8, No.4)*, The Haworth Press, 1986, p.36.

20) Lawrence Shulman and Alex Gitterman, "The Life Model, Mutual Aid, and the Mediating Function", Lawrence Shulman and Alex Gitterman(eds.), *Mutual Aid Groups and The Life Cycle*, F. E. Peacock Publishers, Inc., 1986, p.3.

21) Alex Gitterman, "Building Mutual Support in Groups", *Social Work with Groups*, Vol.12, No.2, 1989, p.6/A.ギッターマン著、岩間伸之訳「グループにおける相互サポートの形成」『社会福祉学論集』第6号,同志社大学大学院文学研究科社会福祉学専攻院生会, 1992, p.35.

22) Shulman, op. cit., p.294.

23) Gitterman, "Building Mutual Support in Groups", op. cit., p.8/A.ギッターマン著、岩間伸之訳「グループにおける相互サポートの形成」,前掲論文, p.36.

24) Schwartz, "The Social Worker in the Group", pp.154-155.

25) 出所: William Schwartz, "Social Group Work: The Interactionist Approach", *Encyclopedia of Social Work*(16th), NASW, 1971, p.1259(17th, 1977, p.1334). 及び William Schwartz, "Between Client and System: The Mediating Function", in Robert W. Roberts and Helen Northen(eds.), *Theories of Social Work with Groups*, Columbia University Press, 1976, p.184.

26) William Schwartz, "Social Group work: The



Interactionist Approach", *Encyclopedia of Social Work* (17th), NASW, 1977, p.1334.

27) Ibid., p.1333.

28) Schwartz, "The Social Worker in the Group", pp.157-158.

29) W.シュワルツ著、前田ケイ訳「ソーシャルワーク実践におけるグループの活用について」W.シュワル

ツ・S.R.ザルバ編／前田ケイ（監訳）・大利一雄・津金正司共訳『グループワークの実際』相川書房, 1978, pp.12-13.／William Schwartz, "On the Use of Groups in Social Work Practice", in William Schwartz and Serapio R. Zalba(eds.), *The Practice of Group Work*, Columbia University Press, 1971, pp.13-14.

30) Ibid., p.15.

### Summary

The purpose of this paper is to show the theory foundation and the evaluation of the Schwartz' theory. This theory foundation is composed of three contents.

1. introduction
2. social work theory and Schwartz' theory
3. theory foundation(1): symbiotic interdependence and mutual aid
4. theory foundation(2): mutual aid system and triangular model
5. theory foundation(3): tuning-in and contract
6. evaluation of the Schwartz' theory
7. conclusion